

第1学年 国語科学習指導案

書式は学校の指定に合わせて調整してお使いください。

日 時 令和 年 月 日 () 第 校時
場 所
指導者

1 単元名

「こえをとどけよう」 教材名「こえをとどけよう」

2 単元の目標

次の学びを目指す。知識・技能では、音と文字の関係や発音を確かめ、姿勢や口の形、声の出し方に注意して話す。思考・判断・表現では、相手との距離を変えて話し、聞こえ方の返事を基に声を調整する。交流や試行の前後を比べ、声の試し方の記録を見直そうとする。

3 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①音と文字の関係や発音を確かめ、姿勢や口の形、声の出し方に注意して話している。（〔知識及び技能〕(1)イ）	①「話すこと・聞くこと」において、相手との距離を変えて話し、聞こえ方の返事を基に声を調整している。（A(1)ウ）	①見通しをもって言葉や表現を検討し、交流で気付いた点を基に、自分の読み方や表し方を見直そうとしている。

4 指導上の考察

（1）単元について

この単元では、相手に届く声の大きさと姿勢を中心に学ぶ。相手との距離を変えて話し、聞こえ方の返事を基に声を調整する活動を組むことで、言葉について知ることと、目的に合わせて使うことを結び付ける。指導要領の〔知識及び技能〕(1)イとA(1)ウに関係する学習である。成果は、声の試し方の記録に示した判断と理由から捉える。

（2）児童について

（学級の子どもの様子を先生が書く）

（3）指導について

予想される難しさは、大声なら必ずよいと考えることである。聞き手が聞き取りやすかったかを伝え、無理な声を出さず試す。初めの答えを消さずに残し、学習後に何を変えたか、なぜ残したかを比較できるようにする。児童の反応は予想である。実在の学級の姿を示すものではない。読む速さや記述量の差を、そのまま国語の力の差として扱わない。

5 指導と評価の計画（全1時間）

次	時	学習活動	評価規準（評価方法）
第1次	1 （本 時）	○相手との距離を変えて話し、聞こえ方の返事を基に声を調整する。 ○考えた理由を交流し、声の試し方の記録を仕上げる。	知①・思①（学習記録）／態① は関連する学習の記録も合わせて見る。



6 本時の指導 (1/1)

(1) 本時の目標

相手との距離を変えて話し、聞こえ方の返事を基に声を調整することができる。

(2) 学習過程

段階	学習活動 (○主な発問) ・予想される児童の反応	指導上の留意点 (◎評価)
導入 (分)	1 身近な経験と既習の言葉を確認、今日使う教材や資料を準備する。 ○「近くの友達と離れた友達では同じ声でよいか」 【めあて】相手に届く声の大きさと姿勢について、自分の考えと理由を表そう。 〈予想される児童の反応〉 ・近いときは小さめでも聞こえた。 ・どこを確認すれば答えられるか、使う教材や資料を見ている。	本時に使う具体例を見える所へ置く。大声なら必ずよいと考える姿が見られても、すぐに訂正させず、どの言葉や経験からそう判断したかを聞き取る。
展開 (分)	2 相手との距離を変えて話し、聞こえ方の返事を基に声を調整する。 3 話し手と聞き手を交代し、相手が伝えた内容を確認して質問や応答を返す。 4 「近くの友達と離れた友達では同じ声でよいか」を観点に、伝わった内容と伝わりにくかった点を確認、もう一度話したり聞いたりする。 〈予想される児童の反応〉 ・近いときは小さめでも聞こえた。 ・友達の説明や試した結果と比べ、最初の答えを直すか検討している。	聞き手が聞き取りやすかったかを伝え、無理な声を出さず試す。知識・技能では、音と文字の関係や発音を確認、姿勢や口の形、声の出し方に注意して話している。この姿を、使った言葉や読み書きの様子で確かめる。口頭で説明する、対象を指す、教師に記録してもらうなど表し方を選べるようにする。 ◎①相手との距離を変えて話し、聞こえ方の返事を基に声を調整している。 (A(1)ウ) (発言・聞き手の応答・聞き取りや話し方の記録)
まとめ (分)	5 声の試し方の記録を確認、本時に選んだ言葉や方法と、その理由を伝える。 【まとめ】声の出し方は、音の特徴と聞き手への伝わり方を確認しながら調整する。 6 最初から変えた点、理由を確認して残した点を振り返る。 〈予想される児童の反応〉 ・自分が選んだ言葉や方法について、確かめたことを理由として説明している。	結論が教師の例と同じかだけで判定しない。近くの友達と離れた友達では同じ声でよいかへの答えに、語句や事実を示した説明があるかを見る。課題が残る場合は、次の関連学習でも同じ観点で記録を集める。 ◎知① (声の試し方の記録と実際の言葉の使用) ・ 態① (単元を通した試行や見直し)

(3) 本時の評価

おおむね満足できる状況は、相手との距離を変えて話し、聞こえ方の返事を基に声を調整している姿である。発言・聞き手の応答・聞き取りや話し方の記録を基に判断する。大声なら必ずよいと考える場合は、聞き手が聞き取りやすかったかを伝え、無理な声を出さず試す。読み書きの速さや発表の回数では

なく、本時の目標に関わる言葉の使い方と判断を捉える。

(4) 板書計画（縦書き・右から左へ）

縦書きで右から左へ構成する。右端に単元名と本時の問い。その左に、児童が最初に出した考えと比較する例を置く。中央には相手に届く声の大きさと姿勢を確かめる語句や関係を並べ、線や矢印で根拠と判断を結ぶ。左側に声の試し方の記録で残す項目と見直しの理由を置く。左端は本時に理解できたこととその後を使う場面の記録にする。教科書の台詞や文章はこの配布物へ複製しない。

AIが作成した授業案です。授業での検証は未実施です。自校の教材・年間計画・学級の実態に合わせて確認してください。



Threads「三重でAI使うなら」 (@mie_ai_katsuyo)
https://www.threads.com/@mie_ai_katsuyo

LINEオープンチャット
みえ先生ラボ

